

児童養護施設の入所児童に対して 大学生が抱くイメージ

—児童養護施設におけるボランティア経験に着目して—

依田 尚也

[キーワード：①児童養護施設 ②入所児童 ③ボランティア]

1. 問題と目的

児童養護施設とは、「乳児を除いて、保護者のない児童、虐待されている児童その他環境上養護を要する児童を入所させて、これを養護し、あわせてその自立を支援することを目的とする施設（児童福祉法第41条）」のことである。厚生労働省の調査（2004）によれば、様々な事情により児童養護施設で生活している子どもが全国に約3万人いるという。その事情の例としては、「父母の虐待」・「父母の行方不明」・「父母の就労」などが挙げられ、中でも注目すべきは「虐待」である。西澤（1998）は、東京都内の児童養護施設に入所中の子どもを対象として調査を行い、彼らの約52%に被虐待経験があるということを明らかにした。そして、“ある意味では本来、「養護に欠ける子ども」の養育を担うものとして位置づけられている児童養護施設が、虐待を受けた子どもを養育する施設へと、事実上の役割転換が行われている”と述べている。このように、児童養護施設の入所児童は過去に過酷な環境下に置かれていたことが多く、なおかつ家族と離れ離れになってしまっているため、心に様々なトラウマやストレスを抱えており、心理的なケアが必要とされている。そのため、入所児童を対象とする心理学的研究がこれまでに多く

なされてきた。坪井 (2005) は、児童養護施設に入所している子どもたちの行動と情緒について調査を行った結果、入所児童は一般の子どもに比べて問題行動が多く、何らかの事情で家族と離れて施設に入所していることが行動や情緒の問題の大きさに影響している可能性が示された。また、入所児童を被虐待経験のある群とない群とに分けたところ、被虐待経験が子どもの行動や情緒の問題に大きな影響を及ぼすことが確認された。これらのことから、坪井 (2005) は“虐待を受けた子どもたちの問題行動に対しては、生活場面での適切な対応が重要であり、心理職のみならず、子どもと個別に関わることのできる職員の加配など、施設の人員配置の見直しも含めた体制作りの必要性が示唆された”と結論づけている。

上記の坪井 (2005) の研究のように、入所児童に対する心理学的研究の多くは、入所児童自身の抱える行動や情緒の問題について明らかにしようとするものであった。一方で、入所児童だけではなく、その周りにはいる人間や環境にも着目した研究が少ないながらも存在する。その中から、田中 (2004) と齊藤 (2007) の研究を紹介したい。まず、田中 (2004) は、入所児童に対してインタビュー調査を行い、彼らが社会からどのような目で見られていると感じているのかを明らかにしようとした。その結果、彼らは「親と一緒に暮すことのできない子ども」であり、ゆえに「愛情豊かな家族の温かさを知らず、しかも、きちんとしたしつけもされずに育った子ども」であるため、憐れまれると同時に特異な存在として見なされている、と感知していることが示された。また、インタビューによって、彼らが「児童養護施設」という名称に起因する否定的なイメージを受けていることが明らかとなった。具体的には、「養護」という言葉は「養護学校」や「養護学級」を想起させるため、入所児童は「知恵遅れ」というカテゴライズを受けてしまうのである。さらに、「施設」という言葉は鑑別所や教護院といった反社会的行動をとった子どものための施設を想起させてしまうため、入所児童も今後問

題を起こしても不思議ではない者と見なされてしまうのである。田中（2004）は、児童養護施設の社会的役割が社会一般に理解されていないため、入所児童はこのような偏見をもって見られてしまうのだと述べている。次に、齊藤（2007）は、入所児童の多くが社会からの偏った評価に悩んでいることに注目した。そして、そもそも児童養護施設とは現代の社会においてどのようなイメージを抱かれている存在なのかを明らかにし、そのイメージを形成する要因を養育観から探索的に検討するため、女子大生とその母親を対象に質問紙調査を行った。その結果、「親子は一緒に暮らすべきである」という養育観を抱いていると、入所児童は「親と一緒に住めないかわいそうな子」であるから、経済的に困窮していて、問題を持っている、といったイメージが形成されることが考えられた。

先に述べたように、これまでの入所児童に対する心理学的研究の多くは、彼らの示す行動や情緒の問題を明確化することに重点を置くものであった。しかし、森田（2006）は、入所児童は被虐待経験といった自分の持っている要因によってだけでなく、周囲の偏見によっても問題行動を起こすと述べている。具体的には、彼らは一般家庭の子どもたちと同じように扱われることを求めているのであり、前述したような周りの人間の偏見を敏感に感じ取って問題行動という形で反発するのである。よって、入所児童本人に着目した研究に加えて、周りの人間が彼らに対しどのようなイメージを抱いているのかということに着目した研究をさらに行うことは、彼らをより深く理解した上で心理的なケアを実施する為にも重要であると考えられる。

ここで、先に挙げた森田（2006）は入所児童への偏見に着目しているが、従来の心理学的研究においては、偏見の対象となりやすい人たちとの接触経験がその対象に対する偏見の変容をもたらす、ということを示したものがいくつか存在する。山内（1994）は、視覚障害者に対する態度の変容をおよぼす対人的接触の効果について研究を行った。その結

果、大学生の健常者が視覚障害者と共同作業などを行ったところ、彼らの視覚障害者に対するイメージはポジティブに変化したということが示された。一方で、上瀬（2001）の研究においては、「駅や道路で視覚障害者を偶然見かけるような経験」が、大学生の彼らに対する印象をネガティブに変化させてしまうということが明らかとなった。つまり、視覚障害者と健常者の偶然的接触が、むしろネガティブなイメージの形成・強化に結びつくということが示唆されたのである。

これらの研究から、偏見の対象となることが多い児童養護施設の入所児童と接触する経験を持つことによって、一般の人々が彼らに対して抱くイメージにも何らかの変化が生じるのではないかと考えられる。しかし、筆者が調べた限りでは、入所児童との「接触経験」に着目した研究は見当たらない。一般の人々と入所児童の接触の機会としてまず考えられるのは、施設におけるボランティア活動ではないだろうか。そこで、本研究では、児童養護施設におけるボランティア経験の有無に着目しつつ、大学生を対象に齊藤（2007）と同様の質問紙調査を行いたい。そして、ボランティア経験が入所児童に対するイメージにもたらす影響や、入所児童に対するイメージとそれを形成する養育観との関係を検討していきたい。最後に、本研究の結果が入所児童への心理的なケアの実践に対して示唆することを考察したい。

2. 方法

2-1 調査対象者

東京都の大学に通う大学生167名（男性83名、女性84名）

2-2 質問紙

齊藤（2007）が作成したものを一部変更した、24項目から構成される入所児童イメージ尺度、および20項目から構成される養育観尺度を用い

た。どちらについても、それぞれの項目について「あてはまる」・「どちらかといえばあてはまる」・「どちらかといえばあてはまらない」・「あてはまらない」の4件法で回答を求めた。また、児童養護施設におけるボランティア経験の有無についても併せて尋ねた。

2-3 手続き

大学の講義時間を用いて質問紙を一斉配布し、その日のうちに回収した。

3. 結果

3-1 入所児童イメージ尺度の分析

入所児童に対して抱くイメージを測定する24項目について、「あてはまる」を4点、「どちらかといえばあてはまる」を3点、「どちらかといえばあてはまらない」を2点、「あてはまらない」を1点というように回答を得点化した上で、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の変化は4.44、2.61、1.61、1.57、1.37、1.15、…というものであり、4因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度4因子を仮定して主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった10項目（項目1、6、8、9、11、13、15、21、22、24）を分析から除外し、再度主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった1項目（項目7）を分析から除外し、再度主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。プロマックス回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表1に示す。なお、回転前の4因子で13項目の全分散を説明する割合は58.35%であった。

次に、それぞれの因子について、平均値・SD・内的整合性を検討するための α 係数を算出したところ、第1因子は、平均=2.07・SD=

0.56・ α = .67であった。そして、4項目で構成されており、「子ども同士の仲が悪そうだ」、「職員からの愛情が不足していると思う」など、児童養護施設での生活における彼らの情緒的な側面に関する項目が高い負荷量を示していた。そこで「情緒的環境」因子と命名した。情緒的環境下位尺度に相当する4項目の回答得点を合計して算出される尺度得点が高いほど、「入所児童は情緒的な温かさに欠けた環境の下で生活してい

表1 入所児童イメージ尺度の因子分析結果（プロマックス回転後の因子パターン）

項目内容	I	II	III	IV
10, 児童養護施設の子どもたちは、子ども同士の仲が悪そうだと思う	.95	.08	-.23	-.15
16, 児童養護施設で生活している子どもたちは衛生面などに問題がありそうだと思う	.52	-.07	-.03	.15
12, 児童養護施設の子どもたちは職員からの愛情が不足していると思う	.51	-.09	.22	.15
20, 児童養護施設は子どもたちにとって家庭の代わりとなるのに十分な場所ではないと思う	.40	-.05	.12	.09
14, 児童養護施設という環境で暮らしている子どもたちは精神的に強いと思う	-.03	.68	.14	-.07
5, 児童養護施設の子どもたちは共同生活をしているので、一般家庭の子どもたちより協調性があると思う	.02	.59	-.02	.12
19, 児童養護施設という環境で育つ子どもは、家庭で過ごす子どもよりも他者を思いやる気持ちが強いと思う	.02	.59	-.04	.14
2, 児童養護施設の子どもたちは将来自立した大人になれると思う	.04	.46	-.04	-.12
3, 児童養護施設の子どもたちは十分にお金をかけてもらえないと思う	-.04	.15	.62	-.14
4, 児童養護施設の子どもたちは着古した洋服を着ていると思う	.19	.11	.55	.06
23, 児童養護施設の子どもたちは十分なお小遣いをもらっていると思う	.10	.22	-.51	-.01
18, 児童養護施設の子どもたちは学校でいじめられていると思う	.34	-.08	.05	.78
17, 児童養護施設にいる子どもたちは、施設の他の子どもたちと仲良く生活していると思う	-.29	.25	-.22	.47
因子間相関	I	II	III	IV
I	—	-.14	.32	.11
II		—	.03	.05
III			—	.11
IV				—

る」というイメージが強いことを示す。

第2因子は、平均=2.80・SD=0.60・ α =.66であった。そして、4項目で構成されており、「精神的に強い」、「協調性がある」、「思いやりがある」など、入所児童の特性に関する項目が高い負荷量を示していた。そこで「子どもの特性」因子と命名した。子どもの特性下位尺度得点に相当する4項目の回答得点を合計して算出される尺度得点が高いほど、「入所児童はポジティブな特性を持っている」というイメージが強いことを示す。

第3因子は、平均=2.86・SD=0.57・ α =.55であった。そして、3項目から構成されており、「十分にお金をかけてもらえないと思う」・「着古した洋服を着ていると思う」など、児童養護施設での生活における彼らの物質的な側面に関する項目が高い負荷量を示していた。そこで「物質的環境」因子と命名した。物質的環境下位尺度得点に相当する3項目の回答得点を合計して算出される尺度得点が高いほど、「入所児童は物やお金が乏しい環境の下で生活している」というイメージが強いことを示す。

2項目から構成される第4因子については、平均=2.58・SD=0.56・ α =.29であり、内的整合性が不十分であることから、今回の研究においては分析の対象から外した。入所児童イメージの下位尺度間相関は表2の通りである。

表2 入所児童イメージの下位尺度間相関と平均、SD、 α 係数

	情緒的環境	子どもの特性	物質的環境	平均	SD	α
情緒的環境	—	-.04	.27**	2.07	0.56	.67
子どもの特性		—	.05	2.80	0.60	.66
物質的環境			—	2.86	0.57	.55

** p <.01

3-2 養育観尺度の分析

養育観を測定する20項目について、「あてはまる」を4点、「どちらかといえばあてはまる」を3点、「どちらかといえばあてはまらない」を2点、「あてはまらない」を1点というように回答を得点化した上で、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の変化は4.00、2.92、1.43、1.19、1.11、1.03、…というものであり、3因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度3因子を仮定して主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった2項目(項目10、16)を分析から除外し、再度主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった1項目(項目3)を分析から除外し、再度主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。プロマックス回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を表3に示す。なお、回転前の3因子で17項目の全分散を説明する割合は45.28%であった。

次に、それぞれの因子について、平均値・SD・内的整合性を検討するための α 係数を算出したところ、第1因子は、平均=3.04・SD=0.48・ α =.78であった。そして、9項目で構成されており、「親はなにがあっても子どもを手放すべきではない」、「子どもを生んだら親は絶対に養育の義務をはたさなければいけない」、「子どもを他の人に預ける親は信じられない」など、親の子どもに対する養育責任に関する項目が高い負荷量を示していた。そこで「親の絶対養育責任」因子と命名した。親の絶対養育責任下位尺度得点に相当する9項目の回答得点を合計して算出される尺度得点が高いほど、「親は子どもを手放さずに育て上げる責任がある」という養育観が強いということを示す。第2因子は、平均=3.26・SD=0.48・ α =.69であった。そして、5項目で構成されており、「十分な面倒を見られない親と一緒に暮らすなら児童養護施設で生活する方がよい」・「親が面倒見られないのであれば、社会が子どもの面倒を見て良い」・「場合によっては血のつながった親子でも離れて

生活することも選択肢の一つ」など、親と子が離れ離れに生活することを容認する内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「親子の別居容認」因子と命名した。親子の別居容認下位尺度得点に相当する5項目の回答得点を合計して算出される尺度得点が高いほど、「親子が離れ離れに生活していても別によい」という養育観が強いということを示す。

表3 養育観尺度の因子分析結果 (プロマックス回転後の因子パターン)

項目内容	I	II	III
11, 親はなにがあっても子どもを手放すべきではないと思う	.71	-.33	.13
13, 子どもを生んだら親は絶対に養育の義務をはたさなければいけないと思う	.59	.07	.05
6, 子どもを他の人に預ける親は信じられない(受け入れにくい)と思う	.56	-.17	.01
20, 子どもが小さいうちは祖父母や近隣の人あるいは保育所などに預けるべきではないと思う	.55	-.03	.22
7, 親は子どもの一生に対して責任をもつべきだと思う	.53	.16	.00
18, 子どものほとんどの面倒を見るのは実親であるべきだと思う	.50	.20	-.18
9, 親と一緒に生活できない子たちはかわいそうだと思う	.50	.16	-.11
15, 親と一緒に暮らせない子は苦しんでいると思う	.42	.14	-.25
1, 子どもは家族と一緒に生活すべきであると思う	.41	-.04	-.33
8, 十分な面倒を見れない親と一緒に暮らすなら児童養護施設で生活するほうがよいと思う	.00	.66	.06
4, 親が面倒を見れないのであれば、社会が子どもの面倒を見てもよいと思う	.01	.65	-.09
5, 場合によっては血のつながった親子でも離れて生活することも選択肢の一つだと思う	-.27	.48	-.04
19, 親に人格的な問題がある場合は子どもは他の人や施設によって育てられるべきだと思う	-.20	.47	-.17
14, 子どもや実親だけでなく周囲の人や施設が協力して面倒を見ていくべきだと思う	.23	.42	.03
2, 親子の血のつながりを重視するのは古臭い考えであると思う	.11	.08	.64
17, 現代の家族は多様化しているから親と子どもが一緒にくらししていない家族がいても珍しいとは思わない	-.02	.09	.42
12, 子どもは実親が育てなくても元気に育つと思う	-.05	.17	.41
因子間相関	I	II	III
I	—	.05	.35
II		—	.16
III			—

第3因子は、平均=2.69・SD=0.61・ α =.49であった。そして、3項目から構成されており、「親子の血のつながりを重視するのは古臭い考えである」・「子どもは実親が育てなくても元気に育つと思う」など、親子の血のつながりを重要視しない項目が高い負荷量を示していた。そこで「親子の血のつながりの軽視」因子と命名した。親子の血のつながりの軽視下位尺度得点に相当する3項目の回答得点を合計して算出される尺度得点が高いほど、「親子の血のつながりというのは大切ではない」という養育観が強いということを示す。養育観の下位尺度間相関は表4の通りである。

表4 養育観の下位尺度間相関と平均、SD、 α 係数

	親の 養育の 絶対 責任	別 居 親 子の 容 認	軽 視 つ な が り の 血 の	平 均	SD	α
親の絶対養育責任	—	.05	-.22**	3.04	0.48	.78
親子の別居容認		—	.27**	3.26	0.48	.69
親子の血のつながりの軽視			—	2.69	0.61	.49

** $p < .01$

3-3 児童養護施設でのボランティア経験の有無による入所児童イメージの違いの検討

児童養護施設でのボランティア経験の有無による入所児童イメージの違いを検討するために、入所児童イメージの各下位尺度得点について t 検定を行った。その結果を、表5に示す。なお、児童養護施設でのボランティア経験があるのは26名、未経験は135名であった。表5の通り、物質的環境下位尺度 ($t(157)=2.30, p < .05$) については、経験者より未経験者の方が有意に高い得点であった。情緒的環境下位尺度 (t

(159) = -1.25, *n.s.*) と子どもの特性下位尺度 ($t(158) = -1.26, n.s.$) については、両者の得点差は有意ではなかった。

表5 ボランティア経験者・未経験者の平均値とSDおよびt検定の結果

	ボランティア経験者		ボランティア未経験者		t 値
	平均	SD	平均	SD	
情緒的環境	2.20	0.64	2.05	0.55	-1.25
子どもの特性	2.94	0.55	2.78	0.60	-1.26
物質的環境	2.64	0.65	2.92	0.53	2.30*

* $p < .05$

3-4 入所児童イメージを形成する要因の検討

まず、児童養護施設でのボランティア経験者と未経験者それぞれについて、入所児童イメージの3因子と、養育観の3因子との相関関係を調べるために Pearson の相関係数を算出したところ、表6、7のような結果になった。

表6 入所児童イメージと養育観の相関関係 (ボランティア経験者)

	情緒的環境	子どもの特性	物質的環境	親の絶対養育責任	親子の別居容認	親子の軽視ながりの血の
情緒的環境	—	.04	.41*	.00	-.17	-.48*
子どもの特性		—	-.01	-.11	.11	-.05
物質的環境			—	-.26	-.24	-.22
親の絶対養育責任				—	.02	-.28
親子の別居容認					—	.28
親子の血のつながりの軽視						—

* $p < .05$

表7 入所児童イメージと養育観の相関関係 (ボランティア未経験者)

	情緒的 環境	子 ども の 特 性	物 質 的 環 境	親 の 絶 対 養 育 責 任	別 居 容 認	軽 視 親 子 の 血 の つ な が り
情緒的環境	—	-0.07	.28**	.14	-.14	-.26**
子どもの特性		—	-.08	.24**	.27**	.09
物質的環境			—	.18*	.08	-.06
親の絶対養育責任				—	.05	-.22*
親子の別居容認					—	.26**
親子の血の つながりの軽視						—

* $p < .05$ ** $p < .01$

次に、入所児童に対するイメージを形成する要因を養育観から探索するために重回帰分析を行った。その結果、ボランティア経験者・未経験者のいずれであっても、親子の血のつながりを重視する養育観を抱いていると、入所児童に対して「情緒的な温かさに欠けた環境の下で生活している」というイメージが形成されることが示された (表8、9参照)。

表8 「情緒的環境」を従属変数とする重回帰分析の結果 (ボランティア経験者)

独立変数	β
親の絶対養育責任	-.15
親子の別居容認	-.04
親子の血のつながりの軽視	-.51*
重相関係数	.15

* $p < .05$

表9 「情緒的環境」を従属変数とする重回帰分析の結果 (ボランティア未経験者)

独立変数	β
親の絶対養育責任	.10
親子の別居容認	-.07
親子の血のつながりの軽視	-.23*
重相関係数	.06*

* $p < .05$

4. 考察

4-1 本研究の結果について

本研究では、児童養護施設でのボランティア経験の有無によって、入所児童に対して抱くイメージに違いがあるかどうかを検討した。その結果、ボランティアの経験がある人は、そうでない人に比べて入所児童の置かれている物質的環境に関するイメージがポジティブなものであるということが示された。しかし、入所児童のその他の側面に関するイメージについては、経験の有無による有意な違いは認められなかった。

筆者は都内のある児童養護施設で1年半以上にわたるボランティア活動を行った経験があるが、確かに入所児童は衣食住などの物質的な面で困窮しているという印象を感じさせなかった。施設による違いはもちろんあるであろうが、筆者の活動していた施設の入所児童は一般家庭の子どもたちと同じような服装をしており、携帯ゲーム機やマンガ本をたくさん所有していた。こういった彼らの姿を実際に目の当たりにすることで、入所児童イメージが大きく変容した部分はあったと思う。しかし、本研究の結果が示した通り、ボランティア経験の有無に関係なく、親子の血のつながりを重視する養育観を抱いていると、入所児童は情緒的な温かさに欠けた環境で育っているというイメージが形成されてしまうということが考えられる。現代社会においては、親子関係の希薄化などが問題視されることが多い。しかし、それでも「親子の血のつながり」というものに対する心理的な重みづけが、親以外の養育者によって育てられている入所児童へのイメージ形成に大きな影響を与えているのではないだろうか。

4-2 入所児童への心理的なケアの実践に対する示唆

森田（2006）が述べている通り、児童養護施設の入所児童は一般家庭の子どもたちと同じように扱われることを求めており、周りの人間の偏

見を敏感に感じ取って問題行動という形で反発する、という側面があると考えられている。とすると、一般の人々は、親子の血の繋がりを重視する養育観を持っているゆえに、暗黙のうちに「情緒的な温かさに欠けた環境で育っている、いわば可哀そうな子ども」という色眼鏡を通して彼らと接してしまい、これが問題行動を誘発してしまうことがあるのかもしれない。本研究の結果が示した通り、たとえ児童養護施設でのボランティアを経験していても、このような色眼鏡は根強く持ち続けてしまうものであるのだろう。

ただ、心理臨床の初学者の立場で児童養護施設の心理職に就くことになった田中(2008)は、大学院生時代の児童養護施設におけるボランティア経験を通して、入所児童の生活や職員の苦勞を知ることができたという。そして、これがその後の施設における心理的なケアの実践に役立ったということを述べている。ボランティアのみでは、入所児童の表面的なところしか関われないかもしれない。しかし、実際に児童養護施設という場に行き、その独特な空気を感じるという経験は貴重であり、本や授業だけでは学べないことを得られることだろう。特に、臨床心理士を志し、児童養護施設の心理職に就くことを目指している大学生、大学院生にとって、ボランティアに行くという経験は今後の大きな財産になりえる。もちろん、ボランティアとして入所児童に関わっていた時に抱いていた彼らへのイメージと、心理職という専門家として深いレベルで関わるようになった時の彼らへの理解との間には、大きな隔たりがあることだろう。しかし、心理職がボランティアとして活動していた当時のことを振り返ることで、「情緒的な温かさに欠けた環境で育っている、いわば可哀そうな子ども」といった彼らを取り巻いている世間の目を改めて認識することができ、彼らが日常生活で感じている辛さや憤りについで理解をより深められるのではないだろうか。

4-3 問題点および今後の課題

本研究の問題点および今後の課題は、児童養護施設でのボランティア経験者の人数が未経験者のそれに比べてかなり少なかったことである。両者をより対等に比較するためには、さらに多くのボランティア経験者を調査対象者とする必要があると考えられる。

5. 総括

本研究の目的は、児童養護施設でのボランティア経験が入所児童に対するイメージにもたらす影響や、入所児童に対するイメージとそれを形成する養育観との関係を検討することであった。質問紙調査の結果、児童養護施設においてボランティア活動を行うことによって、彼らの置かれた物質的環境に関するイメージが変容することが示唆された。また、親子の血のつながりを重視する養育観を抱いていると、入所児童は親以外の養育者に育てられているため、「情緒的な温かさに欠けた環境で育っている」というイメージが形成されてしまうことが考えられた。このようなイメージが入所児童の問題行動を誘発してしまっている可能性がある。入所児童の心理的なケアに携わる専門職は、「施設外の人々が入所児童に対して抱くイメージは、その人自身が持つ養育観の影響を受けてゆがんでしまう可能性がある」ということに留意するべきであるということが考えられた。

付記

本論文は、筆者が提出した平成20年度卒業論文を加筆修正したものであり、一部は日本感情心理学会第19回大会・日本パーソナリティ心理学会第20回大会合同大会において発表された。本研究の調査にご協力いただいた皆様、そして本論文の執筆にあたってご指導いただきました山本政人教授、竹網誠一郎教授、吉川眞理准教授に心より御礼申し上げます。

引用文献

- 上瀬由美子 (2001). 視覚障害者一般に対する態度—測定尺度の作成と接触経験・能力認知との関連—情報と社会, 11, 27-36.
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局 (2004). 児童養護施設入所児童等調査結果の概要 <<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2004/07/h0722-2.html>> (2008年10月6日)
- 森田喜治 (2006). 児童養護施設と被虐待児—施設内心理療法家からの提言—創元社
- 西澤 哲 (1998). 虐待を受けた子どものケア—児童養護施設が直面する課題—児童養護, 29, 34-39.
- 齊藤千鶴 (2007). 児童養護施設で暮らすということの社会的評価—かわいそうとみなされる子どもたちへの心理学的研究—日本パーソナリティ心理学大会発表論文集, 16, 120-121.
- 田中みほ (2008). 児童養護施設における女児とのプレイセラピー—治療を支えるもの—心理臨床学研究, 26, 397-408.
- 田中理絵 (2004). 家族崩壊と子どものスティグマ—家族崩壊後の子どもの社会化研究—九州大学出版会
- 坪井裕子 (2005). 被虐待児の行動と情緒の特徴—児童養護施設における調査の検討—教育心理学研究, 53, 110-121.
- 山内隆久 (1994). 障害者に対する態度の変容におよぼす対人的接触の効果—接触相手・情報に対する態度と視覚障害者に対する態度との相互影響過程—北九州大学文学部紀要 (人間関係学科), 1, 59-69.

The College Student's Image about Children Living in a Child Nursing Home:
Focused on a Working Experience as a Volunteer at a Child Nursing Home

NAOYA, Yoda

The purpose of this study was examining the effect of a working experience as a volunteer at a child nursing home on the image of children who live there, and examining the relation between the image of these children and the belief on parenting. Participants, 167 university students, joined this study (questionnaire survey). Results showed that the continuously working experience as a volunteer at a child nursing home cause the change of the image of material environment of them. And if university students have the belief that children should be brought up by their actual parents, they are apt to think that "Children live in a child nursing home are brought up in bad conditions as they are not cared by their actual parents. Such prejudice may affect these children's problem behavior. Therefore, people who contact with these children, especially an expert in clinical-psychology, must be aware of that the children are affected by prejudices in their daily life.

(人文科学研究科心理学専攻 博士後期課程2年)